郊外計画開発住宅地❷

港北ニュータウン

都筑区

市内最大規模の住宅エリアで静かに進行する、世代間の融合

ベビーカーの溢れる街

約4万1000世帯が住む港北ニュータウンは、横浜市内で最大規模の住宅エリアである。同ニュータウンの第一期入居が始まったのは、昭和50年代末。当時の入居者の多くはすでに50～60代にさしかかっているはずだが、地区内には、その名の通り若い世代のエネルギーが満ちあふれている。

その背景には、開発年代が長期にわたっていること、そして住民の入れ代わりの激しさがある。都筑区の人口動態を見ると、人口流入は毎年平均1万7000人、流出は同1万人。都筑区では港北ニュータウン以外の人口流出入は少なく、その大半が港北ニュータウンでの流出入であると推測され、約11万5000人のニュータウン住民のうち、7人に1人が居住歴1年未満ということになる。

しかも平成11年3月にまとめた転入者意識調査では、転入者の7割が西日本をはじめとして遠方からの転入が目立つ。実際、町中で関西弁を耳にすることも多い。

また、港北ニュータウンで目につくのはベビーカーの多さである。小さな子どもがいる30代の子育て層の転入が多いのだ。事実、都筑区の0～9歳の人口構成比は14・0％（平均9・3％）と横浜一高い。

なぜ、子育て層に港北ニュータウンがこんなに人気があるのか。その理由として、市中心部にも都内への通勤にも便利な立地や、30代でもマイホームを取得しやすい比較的手頃な価格のマンションが多く供給されていることなどが考えられる。

しかし、決め手はやはり港北ニュータウンの子育て環境の良さだろう。都筑区が実施した転入者へのアンケート調査によると港北ニュータウンを転入先として選んだ理由として「公園や緑が豊富だから」（49・1％）がトップであり、さらに3割の転入者が「子どもを育てるのに良いところだから」と答えている。

徒歩圏は200メートル

港北ニュータウンに住む子育て中の30代の女性にインタビューすると、このまちの一番の暮らしやすい点は「子連れで歩いても自家用車に乗っても、快適かつ安全に移動できること」だという。これ

Area Data

グリーンマトリックス（緑道と歩行者専用道路を軸にした「歩車分離」システム）の配置

●港北ニュータウン

地勢　港北ニュータウンは、横浜市都心から北北西約12キロ、東京都心から西南約25キロに位置し、総面積は都筑区の総面積の約半分にあたる13・34キロ平方キロメートル。西側を多摩丘陵に接し、その東から下末吉台地にあたる。港北ニュータウン開発に伴い整地されたとはいえ、南北に起伏の多い谷戸の地形の面影を強く残している。

歴史　江戸時代から中原街道沿道として交通の要衝ではあったものの、昭和30年代まで山林と田畑で約9割を占めていた。昭和49年から港北ニュータウン建設事業が着手され、昭和58年から第一期入居が開始された。行政区分では、平成6年11月に港北区と緑区の分区により都筑区と青葉区が誕生するに伴って、港北ニュータウン区域はすべて都筑区内となった。

は、「グリーンマトリックス」と呼ばれる緑道と歩行者専用道路を軸とした港北ニュータウンならではの「歩車分離」のシステムによるところが大きい。

港北ニュータウン内の緑道は、開発以前の谷戸の地形の中に雑木林や水源を生かした公園同士を結びつける形で、総延長約15キロにわたって整備されている。

緑道は歩行者専用道路と一体となって、地区内の公園や学校、集合住宅、商店街などを結びつけ、網の目のように張りめぐらされた歩行者空間をつくり出している。通勤・通学、買い物など日常生活に密着した利用がなされているとともに、生物の生息環境を保全し、散歩やジョギング、親子で水遊びのできるレクリエーション空間としても活用されるように工夫が凝らされている。

一方で地区内には幅員の広い幹線道路網が整備され、また、丘陵地帯で坂が連続しているため、この地区ではマイカー利用が圧倒的に便利な移動手段になっている。

平成10年度実施の区民意識調査では、自家用車を使用する頻度について、4割以上の人が「週に3～4日以上」と答えている。また、地区内住民へのヒアリング調査でも、「徒歩圏は200m」と答える住民が多く、「100m以上は歩かない」という声さえ聞かれた。

●都筑区民の転入前の居住地

資料:「都筑区新規転入者アンケート」(平成12年)

●港北ニュータウンの転入先選択理由

資料:「都筑区新規転入者アンケート」(平成12年)

このような住民の車への過度の依存は、歩いて暮らせる「グリーンマトリックスシステム」に微妙な影を落とし始めている。せっかくの緑道も人通りが少なくなれば、荒れ、防犯上危険な状態になる。事実、近年「緑道が暗い、危ない」という住民の苦情が出始めているという。

ただ一方で、「まとめ」(P98)で具体的に触れているように、「グリーンマトリックス」については、自ら、守り育てようという住民層が生まれていることも事実である。

地区内の商業施設についても、駅前センターは大型店舗を核とした商業施設の集積が進み、賑わいをみせているが、駐車場整備が不十分な小規模店舗の多い近隣センターについては、整備が進んでいない状況になっている。(注1)

近隣センターでの若手商業者たちの挑戦

ニュータウン開発初期に整備された荏田地区の「荏田近隣センター」は、まさに、危機に直面している地区内商店街の一つである。

開設当初はニュータウン内には商業施設が少なく売り上げも順調だったが、センター南・北駅周辺の整備や沿道沿いに大型商業施設が集積するに伴い、売り上げが減少。営業不振から、櫛の歯が抜けるように閉店・撤退する店が相次いだ。かつて26店あった商店街加盟店は、いまや13店舗となった。その影響は、毎年恒例の商店街主催の夏祭りを今年は中止するところにまで追い込んだ。

しかし、商店街の20～30代の若手3人が、そうした商店街の姿勢に異議を唱えた。「店が減って人手が足りないのは確かだが、子どもたちは祭りを楽しみにしている。祭りをやめてしまったら、顧客である住民の信頼を失ってしまう」と。彼らは、横浜市が近隣センター活性化のために設けた「荏田近隣センターへの集まり」に出席し、周辺住民とともに、地区の自治会やサークルに協力を呼びかけるなど、秋祭り開催に動いた。

準備期間は2カ月余りだったが、祭り当日は、焼き鳥や焼きそばなどの出店のほか、ペットボトルボウリングやだるま落とし、ストラックアウト、魚釣りなど多彩なイベントが展開された。地域の情報誌に紹介されたこともあり、当日の来場者数も子どもたちを中心に2000名強に及び、近隣センターの細長い遊歩道が押すな押すなの大賑わいとなった。

秋祭りの成功に自信を持った彼らは、今後も年間イベントを継続して実施していくとともに、地域住民と一緒に商店街活性化対策についても考えていきたいと話す。

近隣センターの整備活性化は、歩いても快適に暮らせる港北ニュータウンの暮

らしやすさに重要な意味を持っている。横浜市でも、地域住民や専門家など広く人を集め、これからの時代を見すえた整備のあり方を検討している。

●注1 『港北ニュータウン計画』では、地区内商業施設および公共施設の整備として、駅を中心に徒歩圏600mの駅前センターが4カ所、これを補完する徒歩圏400メートルの近隣センター6カ所の設置が計画されている。

●港北ニュータウン

地権者と新住民を結ぶ都筑民家園

港北ニュータウン地区のまちづくりの歴史を振り返ってみると、住民参加型まちづくりには二つの流れがあることがわかる。

一つは、地縁を軸としたまちづくりの伝統である。昔からこの地に住み、故郷としてきた地権者たちは、ニュータウン開発が進む中、自らでまちづくりについて勉強し、議論を重ね、まちづくり活動を積極的に展開してきた。

一方、入居者たちもさまざまなコミュニティ活動に取り組んできた。例えば、昭和60年代前半からミニコミ紙発行や演劇やコンサート、薪能の企画運営、あるいは周辺の自然環境保護をテーマにした活動などを行っている。これら住民のコミュニティ活動は、顔見知り同士＝知縁型のまちづくりといえるだろう。

ただ、これら二つのまちづくりの歩みはあまり交わることがなかった。むしろ、「昔からの住民とニュータウン住民の間には溝があり、新旧住民の融和が地区の大きな課題である」と言われ続けてきた。

ところが、ニュータウン内に市民利用施設「都筑民家園」が整備されたことをきっかけにして、地縁型まちづくりと知縁型まちづくりが融合し始めている。

同施設は、横浜市歴史博物館に付属する「大塚・歳勝土遺跡公園」の一角に、元は都筑区牛久保にあった江戸時代の民家（注2）を平成9年に移築保存し、市民開放したものである。

この民家園は、農村文化の体験的伝承を目的に設置され、運営は住民たちで組織された愛護会に委ねられている。愛護会の会長は、先祖が800年前からこの地に住み続けているという元小学校校長の大久保さんだ。齢90を超えるが、伝承衣装のファッションショーでモデルをつとめてしまう洒脱な人柄で、愛護会を暖かく包み込むまとめ役だ。

スタッフの一人、佐藤さんは、ニュータウンの開発が始まる以前の昭和30年代にこの地に移り住んできた人である。彼は、当時まさにこの地域の新住民としてニュータウンの区画整理や町内会活動、建築協定の締結などのまちづくりにかかわり続けて来た人だ。佐藤さんは、サラリーマンなので農業の経験はない。民家園を運営しながら、屋敷畑の作物の栽培や、農家ならではの園内の維持管理を一から学んでいったという。

同じく愛護会のスタッフである岡本さんは、昭和58年に入居した港北ニュータウン第一世代。これまで都筑イベントクラブなどの活動を通じてまちづくりのための文化イベントを企画し続けて来た。しの笛や長唄、古典舞踊などの邦楽とギターやアコーディオンなどの洋楽のコンサートを民家園の空間にあわせて組み合わせた「お月見ライブ」は、彼女ならではのアイデアと人脈があってのことだ。

事業の企画・運営を支えるのは、園芸やしの笛、茶道、そば打ち、草履編み、藍染めなどのサークルメンバーと80名くらいの個人ボランティアである。イベントの企画運営だけでなく、掃除や草取り、建物の維持修繕などもスタッフと一緒になって取り組んでいる。

もちろん、都筑民家園の活用についてはそれぞれの思いや意見があり、管理運営をめぐってスタッフの間でも議論があった。だが、「安易に妥協をしない真剣な議論があったからこそ、一層交流が深まった」と運営スタッフの誰もが口を揃える。

さらに、最近は、港北ニュータウンに引っ越してきて2～3年目の30代の子育て世代がボランティアとして企画運営に関わるようになってきた。自分の子どもに限らず、多くの子どもたちに昔の生活を体験してもらいたいと、都筑民家園の活動に関わる親たちが少しずつ増えているのである。

もともと旧長沢住宅のような江戸時代の名主役の家は、旅の芸能者を宿泊させ、村人たちに対してさまざまな芸能を披露するなど、地域の文化交流の場であった。都筑民家園も、まさに世代や居住歴の異なる地域住民間の交流の場、結節点になっている。

●注2 旧長沢家住宅。寄せ棟茅葺きの母屋と馬屋で構成され、母屋の東端に平入りの入口がある。玄関に入ると土間に面して広間があり、囲炉裏が切られている。

都筑民家園